「京都のアマチュアバンドコミュニティと私」

12022079　　田中俊輔

指導教員　　立木茂雄

「京都のアマチュアバンドコミュニティと私」

目次

1　初めに　1

2　本論――京都アマチュアバンドコミュニティと私――　2

第1章　私とコミュニティ　2

1　テーマの決定に即して　2

2　私にしか書けないテーマ　3

3　コミュニティからの影響　3

4　スーパーノア，コミュニティ参画へ　3

第2章　先行研究――『アウトサイダーズ』と『ストリートコーナーソサエティ』―　4

1　『アウトサイダーズ』概説　4

2　『ストリートコーナーソサエティ』概説　5

第3章　方法論――参与観察法――　6

1　社会学における調査法　6

2　調査方法の選択　6

3　参与観察法とはなにか　6

4　研究対象　7

5　用具　7

6　具体的手法　7

第4章　結果――データとその考察――　7

1　考察にあたって―フィールドノート観察―　8

2　実際のデータと考察　8

Ⅰ　コミュニティに共有される価値観と自己観「ダメ人間」　8

Ⅱ　コミュニティへの関わりの深さとそれによって獲得される逸脱状況への肯定性　11

3　まとめ－逸脱状況への肯定性の獲得度合いの違いについて考察－　20

第5章　結論　23

後記　24

1　初めに

社会学とは何か

ある学問分野でひとつの論文を書くに当たって，その作成者には様々な点でその「観点」の明確化が求められる．私の場合，専攻は社会学であるが、始めにそもそも社会学とは何であるか？といったことを考える必要がある．

私は社会学とはある程度論理立った思考に基づいた理論・観点において「社会」という人間集団の中で見られる様々な事象・現象を解釈・説明する学問であると考える．今昔，社会学と呼ばれる分野の諸文献はこの点を共有している．

本論文の要旨と狙い

上記の点を踏まえ，本論文では京都におけるアマチュアバンドコミュニティに参画している私の経験と観察を通じて，コミュニティの文化や意識を説明すると同時に「私」の進路選択や社会に対する諸反応におけるコミュニティからの影響を分析する．

2　本論――京都アマチュアバンドコミュニティと私――

第一章　私とコミュニティ

本章では私とコミュニティとの関係，そしてそのテーマの決定過程について概説する．

1　テーマの決定に即して

とにかく見つめる対象物が無ければ学問は成り立たない，テーマを決めることは論文を書くことに関しての最重要課題である．

現在私は京都を中心に活動しているアマチュアのバンド（band，楽団）である「スーパーノア」にドラム奏者として参加しており，3 年程前より精力的に関西のライブハウスや音楽イベントに出演してきた．通常，バンドというものはバンド単位で各々行動しているが，同時にバンド同士の繋がりを持ち，それら諸バンドが集まって形成されるコミュニティといったものに所属している．私のバンドも多分に漏れず京都のアマチュア，あるいはインディーズと呼ばれるシーンの中でそのコミュニティに所属している．とはいえその「コミュニティ」には明文化された「ルール」は存在していない．しかしながら暗黙の了解や不文律の存在は経験として確実であり，この点は社会学的に十分な調査価値を持つと私は考える．また，こちらもあくまで「経験的に」という枠を出ることはないが「京都のバンドやコミュニティは非常に排他的な部分を持ち，よそ者意識が強い傾向にある」といった

ことが考えられている．これは京都外のバンドやライブハウス関係者，観客と接する中で強く意識されていると感じたことであり，また当の京都のバンドやコミュニティ自身もそれをはっきりと自覚しているふしがある．一体このような状態が何故発生しているかということも大いに研究対象に成り得ると私は考える．

更に最も重要な「気付き」として私が社会成員として生きていく中で適宜求められる諸問題への反応に対して，コミュニティと接する中で獲得していった反応，コミュニティからの影響といったものがあるのではないかということである．

2　私にしか書けないテーマ

この様な状況から私は「京都のアマチュアバンド・インディーズシーンにおけるコミュニティや，その成員であるバンド間の相互作用の特性や実態」を研究対象に決定した．また，一口にシーンと言っても各バンドの形体は様々であり，学生によって形成されるバンド，社会人(フリーターでは無く)主体のバンド，アルバイトをしながらバンドを組んでいる者などが挙げられる．私自身が現在学生であり，私のバンドは学生のみで構成されている．そして卒業とその後の進路選択に迫られている「学生バンド」の「現在の様にバンドを続けたい」という欲求と「就職しなければいけない」といったその他諸々のバイアスの中でのジレンマに対して各々の反応はどのようになされるのか，ということも大きなテーマとして取り組んでいく．

3　コミュニティからの影響

上記で「気付き」と記したコミュニティからの影響であるが具体的にどのようなものであったのか．私を含む現代日本に生きる学生は卒業に際して社会へと飛び出していくことになる．日本において最早テンプレートになりつつある中学校→高等学校→大学→就職という一連の過程は，守らなければならないものとなっている傾向がある．それは「学歴社会」と呼ばれる昨今の合理主義から来る，企業の新卒を優先的に採用しようとする傾向などから発生している.その中で多くの学生はその過程に忠実にのっとって行動していくが，こと私に関してはその流れに乗ることはなかったのである．そして「卒業後，就職せずフリーターをしながらバンドを続ける」という私の反応は，私が参画するアマチュアバンドコミュニティとの関わりの中で獲得された「何か」，言うなれば「こういった問題にはこういった反応をする」といったような「定義」によって発生しているのではないかと私は考えたのである．

4　スーパーノア，コミュニティ参画へ

さて，本節では前述のスーパーノアが活動を開始した契機や，その後京都のアマチュアバンドコミュニティに参画していくまでの過程を概説したい．

私のバンドスーパーノアがその活動を始めたのは2004年1月のことである．当時私が所属していた同志社大学の軽音サークルＳＭＭＡ（SouthernMountainMusicAssociation）において，ギターボーカルの井戸，リードギターの赤井，ベースの岩橋，そして私の4人によって結成された．このバンドには前身と言えるバンドが存在しており，その結成は2003年11月のことである．前身バンドとはドラムのメンバーが変わっている．つまり私が前身バンドのドラマーと入れ替わりになる形でバンドに加入し，スーパーノアは誕生している．このバンドは当初よりオリジナルの楽曲製作や，サークル外での活動を目指しており，1月からの半年間を楽曲製作と学内活動に終始し，2004年7月に京都は烏丸丸太町に存在するライブハウス「陰陽」への出演を最初に学外での活動をスタートさせた．そしてその後京都に存在するアマチュアバンドコミュニティへ本格的に参画していくことになったのである．

第2章　先行研究――『アウトサイダーズ』と『ストリートコーナーソサエティ』――

本章では私が本論文を書くにあたって先行研究としておおいに参考にさせていただいた『アウトサイダーズ』と『ストリートコーナーソサエティ』の2書について概説する．

1　『アウトサイダーズ』概説

『アウトサイダーズ』（ハワード・Ｓ・ベッカー）は1963年に刊行された逸脱論の古典である．本書は社会病理学に分類され，ベッカーにより「逸脱」発生のメカニズムとしての「ラベリング理論」ならびにそれを通して見る社会をテーマに据えている．ラベリング理論を掻い摘んで説明すると，社会集団はそれを破れば逸脱とみなされるような規則を設け，その規則に反した者に対し「アウトサイダー」というレッテル（ラベル）を貼ることで，更なる逸脱を生み出す．ということである．例えばなんらかの罪を犯した人間に対して，社会は「犯罪者」というレッテルを貼る．そして「犯罪者」として社会から扱われる中で罪を犯した人間は「犯罪者としての自己」を強化していくのである．結果，その人間は2度，3度と犯罪を繰り返してしまうようになるのである．これを「予言の自己成就」という．この理論の斬新であった部分はベッカーが逸脱発生の契機を「他者」に求めたところにある．当時の逸脱論において，なぜ逸脱行為が発生するのかということは個人の感情や資質の問題とされていた．しかしベッカーは「社会」という他者のレッテル貼りから

逸脱が生まれるとし，その点を問題視したところが学史的な観点からの重要な意義と言える．

本書を執筆するにあたり，ベッカーはそのデータ収集における方法論として参与観察法を採用している．参与観察法について詳しくは後述するが，観察者がその目で見聞きした会話やその周囲のエピソードをフィールドノートに逐一記入し，そのログの中から重要なセンテンスを抜き出していくことがその概要である．シカゴ大学在学中よりプロのジャズピアニストとして活躍していたベッカーは様々なミュージシャンとの会話や付き合いをフィールドノートへ詳細に記録していった．集団の仲間として彼らと会話し、同時に観察者としてその会話を記録、分析していったのである。そしてそのようにして得られたログを使用してその集団独特の文化や意識を描いている．

2　『ストリートコーナーソサエティ』概説

次に参与観察法を語る上では外すことの出来ない本書『ストリートコーナーソサエティ』（ウィリアム・フット・ホワイト 1943）について概説する．本書ではイタリア人移民居住区であるコーナーヴィルというスラム街における住人たちの社会的世界が描き出されている．ホワイトは若者集団の中に参与し，学生のコミュニティとその街のギャングや政治家たちとの密接な関係や，賭博におけるそのシステムなどを内側から鮮明に描いている．学術論文という形ではあるが，むしろノンフィクション小説などといった趣である点もまた特色である．

その中でも注目すべきは 80 ページに渡って綴られているアペンディクス（付属物，付録）であろう．その中でホワイトは，自らの生い立ち，参与観察に至る経緯，研究計画，参入段階で注意していた点，調査終了後の調査対象との関係，反省点などを語っている．更に当初の予定通り調査が進められたわけでなく，調査中に対象との相互作用などを通して新たな「気付き」を獲得していったこと等も語られており，非常に教唆に富んでいる．全てを紹介することはできないが，私が参与観察を学ぶ上で特に気になった部分を数点挙げておく．

「研究計画」においてホワイトは当初，地区の歴史，経済，政治，教育などの様々なファクターとそれらについての社会的諸態度を特に調査することに関心を示していたこと，更にその大仰な人数を必要とする計画を無理に進めることを断念した旨を語っている（290 - 1）．少人数での調査が合理的であること，また，私自身京都という日本でも特殊な地域のコミュニティを研究する上で，ホワイトが考えたようなファクターを知ることは

必要であると考えていたが，（時間的、量的に）無理のある計画は見直すべきであると感じた．更にホワイトは集団内での立ち位置として，グループへの影響を避けるため，いかなる集団の役職や指導者的地位も引き受けることを避けた（308）ことを注意点として挙げている．

上記のように『ストリートコーナーソサエティ』は現代においても参与観察法の手引き本としておおいに価値のある文献である．

第3章　方法論――参与観察法――

本章では私が本論文を執筆するにあたり採用し，前章においても多分にふれられた社会調査の伝統的手法「参与観察法」について述べていきたい．

1　社会学における調査法

本論文冒頭のように定義付けた「社会学」であるが，その性質上扱うテーマは多岐に渡っており，その範囲は個人間のコミュニケーション（情報伝達）といったミクロな部分からいわゆる社会問題と呼ばれる現象や国家レヴェルの現象などマクロな部分までカバーしている．そして，社会学はその理論・観点の展開において一定量のデータを必要とする．そのデータは社会調査に基づいて取られ，その方法論もまた様々である．大まかに分ければ，観察や文書等の分析，実験などといった質的調査と統計などによる量的調査に分けられ，その選択は各論文のテーマや理論・観点などによって行われる．今回，社会学という分野で論文の執筆をするに当たって，私は上記のような点から自らの観点や立ち位置を明確にすることが求められるのである．

2　調査方法の選択

研究対象のデータを取る上での方法論は前節にておおまかながら述べたが，今回私はその中から「参与観察法」を選択する．理由を挙げると「参与観察」はその特性として閉じられた空間を形成するコミュニティの調査に向いており，また既に調査対象である「京都のバンドコミュニティ」に所属している私にとってはコミュニティに入っていく過程が省略されているため非常に都合が良いからである．

3　参与観察法とはなにか

上記のように私は社会調査の方法として参与観察法を採用したわけであるが，その概要は既に前章，先行研究の項であらかた述べてしまった．おおまかな内容は既に前章で把握していただけたと思う，よって次節からは具体的手法や対象について改めて述べていきた

い.

4　研究対象

第1章ですでに述べた通り私の研究対象は「京都のアマチュアバンドコミュニティ」である．具体的に書くならば，京都という場所におけるライブハウスやその他音楽活動の場で，そこに活動拠点を置くバンドたちによって形成されるコミュニティのことである.

5　用具

基本的にはフィールドノートを使用する．ただし，フィールドノートにこだわる必要は無く，適宜記録しやすい媒体に記録を付けていけば良いと私は考える．テープレコーダーやカメラなどが使用されることもあるが，まず持ち運びすることが容易であること，次に素早い記録を可能とするという理由から，今回私は記録媒体として紙媒体とデジタル媒体を併用することにした．そして前者はいわゆる「紙とえんぴつ」であるが，後者は携帯電話である．携帯電話はその場その場で素早く，且つ紙媒体よりも自然にログを残すことが出来る利点がある．しかしまた，見聞きした会話・エピソードだけではなく，より質の高いデータを取るためには IC レコーダの使用や，インタビューの手法も必要であると感じた.

6　具体的手法

本来，参与観察法において最も時間をかけ，そして最も注意深く行わなければならないことは当該コミュニティへの参入段階である．しかしながら前述の通り，私は京都のアマチュアバンドコミュニティを研究対象と決定した時点（2006年，5回生時）で既にコミュニティへ参入してから3年が経過しており，この点は既にクリアーであった．3年間の中で私はコミュニティ内で成員としてのポジションを獲得しており，研究の開始にあたって私はまず，過去に経験したエピソードや，記憶に残っている会話を書き出すことから始めた．その中からコミュニティ内での規範やルールを暗示するセンテンスを抜き出し，そして同時に就職活動に対する私や私のバンドのメンバー，その他学生バンドマンの反応を記録するように努めた.

第4章　結果――データとその考察――

本章では，実際のフィールドワークの中から得られたデータを基に，コミュニティの具体的解説やログの紹介をし，またそれぞれに考察を加えていく.

具体的なデータの収集に当たっては2006年夏頃からはじめたものであるが，私自身と

コミュニティの繋がりはそれ以前からのものであるため，私の記憶の中から印象に残っているものをとりあげまとめるということも必要であった．

1　考察にあたって―フィールドノート観察―

さて様々な情報を書き記したフィールドノートはそのままでは無構造の情報群でしかない．この様々な情報をいったんフィールドノートを書き記す自分から離れて見つめる必要がある．そしてそれらの情報を諸々のファクターや観点から分別・整理し，その中で得られる直感的ひらめきや，規則性の発見を通して一定の論理だった説明を与える必要がある．

私は自身のフィールドノートの観察過程に於いて「ダメ人間」という頻出単語に目を付け，そこからコミュニティ全体を包んでいる精神性や価値観をラベリング論的観点から説明した．そしてまたコミュニティへの関わりの違いによって諸態度が比例的に変化することの発見の説明も本章の主題である．

2　実際のデータと考察

Ⅰ　コミュニティに共有される価値観と自己観「ダメ人間」

コミュニティ内ではいわゆる一般の生活（学校へ行き，あるいは定職につきながら社会生活をまっとうする）の中で要求される社会的諸態度を同じく要求され，それに答えなければ相応のペナルティを受けることになる．つまりバンド界隈で結成されるコミュニティ内での法規は一般社会から見てそう異常に逸脱したものではないと言える．にも関わらず彼らは自らに対し「ダメ人間」、あるいは「社会生活不適合者」といった烙印を押したがる傾向にあり，さらにはそういった自己観に沿った行動をとりたがる．これは何故か？

私が見て来た現状の中で彼らは立派にアウトサイダーズでありながら貞淑な社会生活者でもあった．加えてコミュニティ内で観察される頻出単語はコミュニティの本質に深く関わっていると考えられるので，本項ではこの自己矛盾的状態に何故陥ったかということと「ダメ人間」観について考えたい．

事例　コミュニティ内での価値観に関しての会話

まず初めに2006年10月18日未明，所属サークルのリハーサルスタジオでの練習後の深夜，メンバー宅にてのメンバーとの会話を紹介する．

赤井「そういえばYさんのバンド，N(ライブハウス)のホームページで紹介されてましたね」

私「ああ，あの載ったバンドは絶対売れないっていう？」

赤井「そうです，でも最近のYさんの活躍は目を見張るものがありますよね」

岩橋「ね，大きいイベントも出てはるし．でもこっち（のコミュニティ）との絡みはあまりないよね？」

赤井「あの人Mさん（コミュニティの中心人物のひとり）に嫌われてますからね」

私「え，それはまたどうして？」

赤井「いや，あの人前にAさん(コミュニティの中心人物のひとり)とバンドやってたじゃないですか？それをいきなり脱退してあんな音楽(主観的表現であるが、コミュニティで好まれる音楽とは離れた音楽と捉える)やられたらねえ」

私「ああ，干されてるってこと？」

赤井「Aさんは仲良い人多いし顔も広いですからね」

私「Aさんってそんな人だったっけ？」

赤井「Aさんがどうっていうよりその周りの人に嫌われちゃったって感じですね」

私「うわー，怖いね」

岩橋「ね，嫌われないようにしなきゃ」

前半で言及されているようなジンクスやその類のジョークはどこのコミュニティにもありがちなものだが，普段声高に言えない「売れたい」という欲求から発生していると言えなくもない．また，後半ではコミュニティのあり方を見て取れる．おおむねコミュニティでは数人の中心人物とそのラインのバンド(いわゆる「横の繋がり」)，そしてその下の世代のバンドによって構成されており，中心人物へのカウンター的な行動はその報復が行われる可能性を持っている．当然このような現象はあらゆる集団においても見られることではある．しかしながらその排他性の強さが証明されるものであると言える．

またコミュニティ全体を通して見られる自己に対する感情として「ダメ人間」というフレーズがある．コミュニティ成員は各々が自らに「ダメ人間」という烙印を押したがる傾向にある．例えば「俺はダメ人間だなぁ」であるとか「お前達は本当にダメ人間」といった形で使用されるフレーズであるが，その概ねの定義は以下の様なものである．

① 定職についおらず，学業にも勤勉でない．

② 遵法精神が低い．

③ メインストリームに迎合出来ない，あるいはするつもりがない．

④ それらが一般に歓迎されない態度であると知りながら訂正することが出来ない，あるいはする必要がないと感じている．

「ダメ人間」は以上の 4 つを概ね満たしている．特に④が重要であり，「ダメ人間」はダメであるとはっきり自覚していながらそれを訂正出来ないでいる状態にあるとき，彼らは皮肉めいた口調で「ダメ人間だなあ」と言う．そしてそこにはある種の諦観めいたものさえ感じさせるのである．しかしながらそこに悲壮感は無く，その状態をよしとする風潮があるのもまた事実である．

さて，「ダメ人間」観自体については上記が全てであるが，勿論コミュニティがコミュニティである以上そこでは更なるアウトサイダーズが生み出される．上記事例のＹさんもそれに当たるが，自称「ダメ人間」達から更にダメとみなされてしまう人たちも少なからず発生するのである．そういった人物にたいしては「あいつはほんとにダメ」，「奴はまじでダメだよ」というように微妙なニュアンスの違いで表現される．ニュアンスの違いを文章で伝えるのは非常に困難であるが，前記「ダメ人間」がやや肯定的に，どこか嬉しそうに唱えられるのに対して，彼ら「ほんとの」ダメ人間からについて語られる時は「心底うんざり」といった感があると言えばわかりやすいだろうか．

この「ダメ人間」観の蔓延に関しては前述ベッカーのラベリング論で説明出来る．彼らは「ダメ人間」というラベルをお互いに貼り付けることで，「ダメ人間」観を強め，更なる「ダメ人間」を生み出していくのである．「ダメ人間」というラベルを貼られ，「ああ，私はダメ人間なんだ」と自己の定義を得た人間は，加速度的に「ダメ人間」になっていく．「ダメ人間」定義では触れなかったが，彼らの特徴として「常軌を逸した行動」を喜ぶ傾向がある．例えば深夜に拾った車椅子に乗って街中や学校を走り回ったり（健常者にも関わらず），酔った勢いにまかせて電柱や道路標識に喧嘩を売ったりといった行動が挙げられる．（余談ではあるが，あらゆる大学でサブカルチャーを主体としたサークル活動等を行う団体の部室やボックスと呼ばれる空間には道路標識等の公共物が多く「お持ち帰り」されているのが見かけられた．れっきとした犯罪である）そのような行動に及ぶとき，彼らは自らが「ダメ人間」であると深く自覚し，「ダメ人間」に認められることで更なる深みに嵌っていくのである．この時諌めてくれる人間があれば，根っからのアウトローでない彼らは我に帰ることが出来るのである．このことから，多くの「ダメ人間」と接することで彼らは「ダメ人間をよしとする」逸脱状況への肯定性を獲得していくのではないかと考えられる．コミュニティとの接触の深さによって比例的に「ダメ人間」度を強めていくのではないだろうか．次項以降ではコミュニティとの関わりの深さというファクターに関して述べていく．

II　コミュニティへの関わりの深さとそれによって獲得される逸脱状況への肯定性

本項ではコミュニティとの関わりの深さの違いが，どのように各人の諸態度の違いとなって現れるかについて説明する．前半では私とN君を中心にどのようにコミュニティに参画し，その中で活動したかについて描く．後半ではコミュニティ各員のコミュニティへの関わりの度合いを「ボロフェスタ」というコミュニティのお祭りを通して説明し，その結果どのような態度の違いが生じたかを「まとめ」にて概説する．

事例　N君という人物

まず始めに私の論文の中で最も重要な人物のひとりとしてN君のことを紹介する．N君は私と同じ同志社大学の2002年度入学生であり，また軽音サークルの同期でもある．N君は大阪に生まれ，その実家から大学まで通っている．N君と私の出会いは2002年の五月ごろ，サークルの新入生歓迎コンパであった．最初に見たとき彼はサイケデリックな色彩の古着にサングラスを着け甘い香りのする煙草を燻らせており，私は彼に対して非常に軽薄な印象を受けた．初対面にも関わらず人に臆することなく接する姿勢を持っており，N君の私に対しての第一声が「自分ドラムやんな？ちょっと叩いてや」であったこともそれに拍車をかけた．N君はギター奏者であったが，その後私とN君が一緒にバンドを組むことは無く，現在もその予定は無い．理由は音楽的な方向性の違いからであり，本文にはあまり関係の無い部分であるためここでは割愛する．

その後N君も私もサークルの中でバンドを組みそれぞれに活動していたが，N君は2002年度末からサークル外でのバンド活動をスタートさせた．そのバンドは「アマガッパ」1)という名前であり，メンバーは結成から現在まで変わっていない．N君よりひとつ上の回生であるベーシストのMさん，N君や私と同じ2002年度にサークルへ入った同期でドラムのRさんの3人で構成される．このバンドはサークル内で結成され，当初よりサークル外での活動を目指していた．サークルという枠を飛び出して学外にまでその活動の幅を広げるバンドはどこのサークルでも少数派である．同志社大学には大小合わせて8つ程の軽音サークルが存在しているが，その中でも特に規模の大きいサークル（60～100人程度で構成される）が4つあり，その中では常時30程度のバンドが活動しているが学外でも活動するバンドは2つ3つといったところである．その理由としては「学外ではオリジナルの楽曲を求められる」ということが挙げられる．学外での活動とはいわゆるライブハウスに出演をするということであり，出演の形式は多様であるが「ブッキングライブ」という

形式がそのほとんどを占めている．ブッキングライブはデモ音源をライブハウスに送ったり渡したりするところから始まる．ライブハウスの店長やブッキングマネージャーと呼ばれる人物はその音源を聞いて，過去に出演したバンド等とそのバンドをライブに「ブッキング」するのである．ライブに出演するバンドの顔ぶれ如何でその日のライブのよしあしや，ひいてはライブハウスの「イロ」といったものが決定されるためライブハウス関係者はブッキングに関しては日々心血を注いでいる．またブッキングライブに集められるバンドはその音楽の指向が同じで音楽的に共通項の多いものであり，そこからバンド間の横のつながりが発生することも多い．そのためライブハウス側にとっても出演するバンド側にとってもブッキングライブは重要な機会であり，もっともポピュラーな形式となっている．そしてそのブッキングライブに出るために送る必要のある音源はオリジナルの楽曲に限られる場合がほとんどであり，そのためにいわゆるコピーバンド（有名なバンドや既存の楽曲を模倣するスタイル）がそのほとんどである学生バンドにおいては，学外での活動は比較的少数派となるのである．

上記のような状況の中でN君はオリジナル楽曲を作るバンドとしてアマガッパを結成することになる．その発端としては「俺はギター下手だし，コピーも苦手だから最初からオリジナルをやってしまえば良いと思ったんだよ」とN君は語っている．

その後N君は私に先駆けて京都のアマチュアバンドのシーンに参戦していくことになり，私と同じアマチュアバンドコミュニティに参加し，その中でバンドに没頭するあまり留年を経験し，その後就職活動を開始することになる．そしてこれらについては詳しく後述していく．

上記のようにN君という人物を概説したが，ここで非常に重要なのはN君と私に非常に多くの共通項があることである．同じ学校で，同じサークルに所属し，同じバンドコミュニティに入り，これまた同じく留年まで経験している．しかしここまで共通したコースを辿っているにもかかわらずN君は就職への道を選ぶことになる．この反応の差がいかに出てきたのかを考える上で，N君は私にとって非常に貴重な比較対象になるのである．

事例　私という人物

方法として私という人間についても観察対象とする以上，私に関しても詳しく述懐する必要がある．私は奈良県に生まれ，小学校，中学校，高校と奈良県で過ごす．現役で同志社大学に進学した後はその生活の中心を京都に移し，特に二回生から京都市内に下宿を始めてからはそのほとんどを京都で過ごしている．そして大学では入学してすぐに学内の軽

音サークルS.M.M.Aに所属するようになる．私とプレイヤーとしての音楽との出会いは高校2年の頃にさかのぼる．当時私は中学校から弓道を続けていたが，高校での弓道部での成績は思うように振るわずやや挫折に近い感情を抱いていた．そんな折に学友から「文化祭でバンドをやってみないか」と誘いがあり，軽い気持ちでそれに応じたのが最初である．その後高校でのバンド活動は文化祭までの軽いものであったが，私にとっては最初に音楽に触れ，その後大学での音楽活動をスタートさせたことのきっかけになったのである．そして大学に進学してからは弓道ではなく音楽をライフワークの一環として行っていくことになる．理由として些細なことではあるが音楽と弓道どちらを選択するか迷っていた私にとって同志社大学の弓道部が私の習った流派と異なっていたことも挙げられる．そして一回生の間はサークル内でコピーバンドを複数組んで活動していたが，二回生の後半からいよいよ学外での活動を始めることになる．

そしてバンド活動に没頭していく中で私は留年を経験し，現在にいたるまで続く就職活動等に対するジレンマを持つことになる．

ここでN君と私を対比して考えると，下宿をしているかどうかの違いがある．N君は実家から大学に通っており下宿の経験は無い．更に私が下宿を開始した時期と京都のアマチュアバンドコミュニティに深く参画していく時期あるいは過程が大きくシンクロしているという点でも下宿の如何は重要なファクターになっている．またN君は実家通いという都合上バイトに関しても大阪周辺で行っており，私がバイトのほとんどを京都で行っていたこと，更にバイトをアマチュアバンドコミュニティの人たちから紹介してもらうことがあった点でも大きく異なっている．このことからN君と私の中でコミュニティとの関わりの深さの度合いが異なっていると考えられる．

事例　N君と私の進路決定に関する会話

次にログの中からN君と私の「進路選択や就職」といった問題に対しての実際の会話を紹介しよう．2006年7月31日新町別館においての会話であり，この日私はN君と二人で食事をすることになった．名目は彼の就職内定祝いである．内容は以下の通りである．

私「内定おめでとう，ところでどこに受かったんだっけ？」

N「おお，ありがとう．○○(某在阪企業)に決まったよ」

私「ああそうか，地元に就職するんだよね．それはやっぱりバンドがあったから？」

N「うん，バンドはこれからも続けていきたいし，京都でやっていくって考えたら転勤のあるとこはきびしいと思ったからね」

私「ふーん，バンドで食べていくってことは考えなかったの？」

N「うん，それは理想だけどね．でもそれは今の時代厳しいことだし，(売れる・売れないを考えず)やりたいことをやれるというメリットもあるからね」

私「なるほどね，じゃあある意味アーティストとしてストイックに生きてく道でもあるわけだね」

N「おう，まあとりあえず就職したら見えてくるものもあるかなと思った．俺はそういう結論を出した．お前はどうするんだ？卒業したらフリーター？」

私「んんー，それがまだ自分でもはっきりしてなくてね，本音を言えば就職したいってのもあるし．でも取り敢えずは卒業したらフリーターやりつつバンドやることになるかなあ」

N「まあ，それもいいんじゃないかな？人生長いし，好きにしたらいいと思う」

私「なんというか，働きたいけど働きたくないという感じかな」

N「わかる気はするよ」.

上記の様にN君は就職という選択によって，「音楽家としてやりたいことをしたい自分」と「(バンドとして)売れるためにはある程度アーティストとして耐える必要がある」ということのジレンマを解消している．また私と彼が進路選択において異なった結論を出したその背景は各々のバンドの構成員の進路選択に対する態度の違いが大きいと感じていた．前述の通り彼のバンドは3人編成であり，既に1人（ベーシストのMさん）が社会人として働き始めていたことが挙げられる．それに対し私のバンドは4人編成であるが，皆現在の所就職の意思は無く，「しばらくはバンドをやっていく」という選択を「なんとなく」ではあるがなされていたのである．結果，この「バンドとして」の総体的な反応が，私とN君個人の行動に反映していると見ることが出来る．またこのことに対する詳しい事情は次の事例にて紹介する．

そしてまた，似た状況下に置かれている彼の選択は私自身の選択に対するバイアスとなり，私の態度に反映されてくるのも明白なことである．

事例　私のバンド内での進路決定に関しての会話

次に私のバンド「スーパーノア」の構成員間で交わされた進路選択や就職活動に対しての会話を紹介していこうと思う．

この会話がなされたのは2006年11月5日深夜，京都は四条大宮を下ってすぐにあるバ

ンドのリハーサルスタジオ 246 でのことである．12 月にスーパーノアやあまがっぱが合同で行う自主企画イベントに向けての練習を終えての一幕である．

赤井「とりあえず，お疲れ様です」

岩橋「お疲れ様」

私「あっ，そういえばそろそろ結成して 3 年になりますね」

赤井「そうですね」

私「もう 3 年も真剣にバンドをやってきたわけですから，そろそろ今後僕らも身の振り方をかんがえていかなきゃいけないね」

赤井「ああー，確かに．ずっと若い若いとは言われてきましたがもうそろそろ良い時期ですよね」

私「うん，今までこういう話はあんまりしてこなかったけど，自分たちの今後のこととかどう考えてる？」

赤井「そう来ますか．そうですねえ，とりあえずせつかくここまでやってきたからには就職活動をしなきゃだとか，そういうのでバンドを解散するっていうのはあんまりかんがえたくはないですね」

私「それは僕もそうなんだけどね，でも実際問題もう僕は 5 回生だし，君たちも 4 回生なわけでしょ？いろいろ，ほら，家庭でのプレッシャーとかも感じてきてるんじゃないの？」

赤井「ああー，わからなくもないですけどね．とりあえず僕はずっとこのバンドでやっていきたいってのはありますよ．まあ，僕が留年すでに決まっていて就職活動っていうのがあまり切迫した問題じゃないってのは当然あるんでしょうけど」

私「赤井君はそうだよね，留年も決まってるしとにかく就職活動よりバンドの方を優先していきたいっていうのがあるわけか」

赤井「それに、学業とバンドと就職活動を全部一緒にやるっていうのは僕には無理があります」

私「なるほど．実家のお父さんとかお母さんってのは何も言ってこないの？」

赤井「いや、なんにも言ってこないですねえ，けっこうほったらかしにされてます」

私「そうなんだ」

赤井「岩橋君はどうなの？」

岩橋「んー，まあ，そうだね，赤井君の話聞いてて思うのはやっぱり僕もバンドやってい

ったらいいんじゃないかなあと思うよ．特に俺は今年で卒業だけどあんまり就職活動する気もないし」

私「それはまた何故？」

岩橋「やっぱりこの中で一番バンド歴長いのが俺っていうのもあるんだろうけど，ずっとバンドで食べていけたらいいなっていうのが夢だったし．まあ諦めきれないっていうのもあると思うよ．特に俺の場合他にもバンドを掛け持ちしてやってるわけだし．そうやって色々関わってると，なんかこう，別にこれでも良いんじゃないかなって気がしてくるんだよ」

私「なるほどねー，大学卒業してすぐ就職っていうテンプレートに従う必要もないよね」

岩橋「そういうこと」

私「岩橋君のとこは親御さんは何も言ってこない？」

岩橋「来ないね，それも全く．うちはほんとにほったらかしだからね．まあでもこれ以上迷惑かけたりするわけにもいかないっていう思いはちょっとはあるよ」

赤井「それはやっぱりありますよね」

私「なるほど．井戸君は？」

井戸「僕はとりあえず期限を決めてやるのがいいかなとは思ってます」

私「期限？」

井戸「そうです．僕もまあ留年じゃないですか．それで岩橋君と田中さんは今年卒業ってことになってはりますけど，後一年くらい，僕と赤井君が卒業するまで本気でバンドに打ち込むっていうのはどうですか？」

私「一年たって駄目だったらどうするの？」

井戸「駄目だったらもう就職するのも良いと思いますよ，とりあえず僕はそうなったら就職活動してみようかなとは思います」

赤井「それはやっぱり普通の企業とか？」

井戸「うん．まあなんでも良いんだけど，とりあえず就職してバンドするっていうのが良いような気がする」

私「やっぱりそれは親からのプレッシャーとかもあったりするの？」

井戸「ああー，けっこうありますねえ，やっぱり」

私「君の家はけっこう厳しそうな感じだもんね」

井戸「うーん，まあそうでもないとは思うんですけど，やっぱりチクチク言われたりはし

ますね．ほんとのこと言うと社会に出たくは無いんですけどね」

私「じゃあ，とりあえずは僕と岩橋君が今年卒業ってことになるわけだけど，岩橋君は卒業したらどうするの？」

岩橋「まあ、フリーターかな．フリーターで生活しながらバンドもやっていくって感じだね．「キキカイカイノルール」[2)]のＳ君とかＨさんもそうやってはるしね．僕もそうしようかなって思う．そう言う田中さんは？」

私「うん，僕もまあフリーターになるかな．と言っても音楽に完全に専念するってわけにはいかないかもしれないけど」

岩橋「どういうこと？」

私「いや，音楽に専念するには専念するけど，やっぱりフリーターから普通の企業に就職するってのはこのご時世なかなか厳しいものがあるじゃない？だから公務員試験とか受けたり勉強するってのもひとつの手だと思うよ」

岩橋「ああ，保険か」

私「そう，保険」

岩橋「まあでも最悪普通の企業に就職は無理だとしても，なんとかなるんじゃないかなってのは思うけどね」

私「どうして？」

岩橋「いや、諸先輩方を見てたらけっこうアマチュアバンドコミュニティに属してずっとそこにべったりしてた人たちでもそこで就職の道を見つけてはるやんか？」

私「ああー，ライブハウスの店長とか？」

岩橋「そう，リハーサルスタジオの経営者とかね」

私「そういえばＯ君（同じアマチュアバンドコミュニティに属するバンドの人間）なんかも卒業してから今バンドやりながらＰＡ[3)]の修行してるもんなあ」

岩橋「でしょ？バンドやってるっていってもその時間が全くの無駄になるっていうのはあんまり無いと思うよ」

私「なるほどね．あんまり無闇に悲観する必要は無いかもしれないね」

赤井「僕もやっぱりけっこうどうにでもなると思ってますね．まあ，それは単純に僕が駄目な人たちと長く関わり過ぎてるってだけかもしれませんけど」

岩橋「まあ，とりあえず１年ガッツリとやってみようよ」

井戸「なんとでもなりますよ」

私「そうだね，あと1年頑張ってみようか」
赤井「駄目でもバンドをすぐに解散してどうこうっていうのでも無いですしね」.

では最初にメンバー間での家庭の状況の違いから考えてみよう．まず最年長ベーシストの岩橋は2年間の浪人（高校時代からのバンド活動を延長していたため）から入学している．そして生まれ育った神戸を離れ現在は京都で下宿をしている．次にギターの赤井も生まれ育った岐阜を離れて現在京都に下宿している．そしてギターボーカルの井戸は3回生の時の一年間だけは下宿を経験していたが，それ以外の期間は下宿をしておらず，実家の神戸から電車で大学に通っている．以上のことからまず，下宿をしているということ，そして下宿の期間の長さが，この就職活動という問題に対する反応の違いになって現れているのではないかと考えられる．つまり下宿を始めることによって親元を離れると，単純に親や家族との直接的な対話やコミュニケーションは減ると考えられる．そのことによって親などからの就職への考え方の補正がかからず，またアマチュアバンドコミュニティ等へ参画する時間が単純に増えることによっていわゆるコミュニティ側の思考を獲得する傾向にあると考えられる.大学生活において,親元を離れた期間が最も長いのは赤井と岩橋で,その期間は入学当初からの4年間である．次に長いのは私で大学2回生から4回生の間の3年間である．そして最も短いのが1年間の下宿を行った井戸である．そして就職活動に対し最もあっけらかんとした楽観的な反応をしているのは赤井と岩橋であり，次いで私，井戸の順にその反応をややナーバスなものにさせている．

次に下宿をしているかどうかというファクターと絡まってコミュニティに所属する他者との関わりの度合いも変わってくる．アマチュアバンドコミュニティの人間と関わる場というものはそのほとんどがライブハウスあるいはライブ会場となってくる．コミュニティの人間同士の個人的な交友や親睦の場といったものは勿論存在しているがそれ以上にコミュニケーションの場として大きいのはやはりライブ会場になってくる．そしてライブ会場に居るという単純な時間に長短によっても，やはりコミュニティとの関わりの深さが変わってくることになる．一度のライブというものは準備も含めてたくさんの時間を必要とする．例えばあるライブハウスで3バンド出演するライブが行われるとして，1バンドの演奏時間が転換込みの45分だとして19時開場19時30分開演の場合,出演バンドは遅くとも16時にはライブハウスに入り，リハーサルやその他打ち合わせを行わなければならない．演奏終了予定の21時45分までに拘束される時間は6時間近くになるわけである．更

にライブ終了後には打ち上げが用意される場合がほとんどで，打ち上げに参加することはバンド間のつながりを作り，あるいは強化し，コミュニティへの参画などにも直結していく重要なファクターである．ここにおいて実家住まいは若干の不利を受けることになる．おおよそ打ち上げが行われるのは片付けの終了した後であり，その開始時間はおおよそ23時から24時の間である．県外から京都へ通っている人間にとってこれは実質的に打ち上げに参加出来ないことを意味する．当然，京都に住んでいるメンバー宅へ泊めてもらう了承を取り付けて打ち上げに参加するという選択肢もあるが，それでもやはり翌日以降の予定や家庭状況，頻繁に誰かの家に泊まるのははばかられるといった諸々の事情によって毎回の打ち上げに参加することはやはり下宿をしている人間よりは困難であることは間違いない．このコミュニティ成員に対するコミュニケーションを獲得する場に参加しがたいという状況はやはり，関わりの度合いの深さの相違となって現れてくるのである．

事例　ボロフェスタ――コミュニティのお祭り――

次に私とそのバンド「スーパーノア」の所属しているコミュニティを象徴する大規模な音楽イベント「ボロフェスタ」を紹介したい．

ボロフェスタの歴史は2002年に始まる．それからおおむね毎年の10月第2週末に2日ないし3日に渡って京都大学西部講堂と講堂前広場において開催されてきている．年々その規模を増しており，京都のアマチュア・インディーズシーンの中で大きな存在となっている．発起人は「ロボピッチャー」（バンド），「Limited Express (has gone?)」（バンド），「ゆーきゃん」（ユニット）という3組のインディーズアーティスト[4)]にライブハウス店長である「MCハブちゃん」[5)]を加えた4組である．その理念として「メジャー，インディーズの垣根を越え自分達の本当に良いと思える音楽を集める」ことを掲げており「音楽好きの，音楽好きによる，音楽好きのための祭典」として評される．

このイベントが他の音楽イベントと異なった特性として持っているのが「全て手作りである」ということである．つまりイベンターやその他様々な中間業者を一切介さずに，全てコミュニティの人間や募集によって集められたボランティアスタッフによってイベントが作り上げられている．観客動員数がのべ5,000人を優に超す規模のイベントとしてこれは極めて異例なことである．具体的にその作業を挙げていくとライブハウスと同じくブッキング作業，アーティストへの出演依頼とその交渉，スポンサー（フライヤー[6)]その他への広告と引き換え）をとりつけるための依頼交渉，フライヤーの注文・作成，フライヤーの配布，各種宣伝やメディアへの営業，ライブ会場の構築，大道具，炊き出し，イベント

当日の各種雑務と多岐に渡っているが，これらを全て前述のスタッフだけで行っている．

この京都のインディーズシーンにおいて最大のイベントは京都で活動する若いバンドマンたちにとっては非常に魅力的なものである．前述の4組の意向により京都という土地でやっているという地元意識を高めるために，京都の若手アマチュアバンドへの出演依頼も多数行われている．知名度，注目度が共に高いこのイベントへの出演を果たすことはひとつの若手のアマチュアバンドにとってはひとつのステータスとなっている．要するにバンドに「ハクがつく」わけである．さらにコミュニティ内の若手バンドの中からいくつかをピックアップし，中心の4組に加えて「共催」という形をとる．コミュニティの中心人物の多くは30代前後の年齢であり，20代の若手バンドを積極的にひっぱりあげることによって京都というシーン全体の活性化にも一役買っている．

このボロフェスタにスタッフ，出演者として参加しているどうかということはアマチュアバンドコミュニティにどれぐらい深く関わっているかを判断する上で大きな指標となってくる．コミュニティにとって最大のイベントであり最も多くのコミュニティ成員が集まる，そして半年間もの準備期間を経て催されるこのイベントに関わるということは嫌が上にもコミュニティ成員間のコミュニケーションが行われるということであり，このイベントへの関わり方如何でコミュニティへの関わりの深さが計れるということは当然であると私は考える．次のまとめではこのイベントへの関わりの深さの違う人物を数人ピックアップし，それぞれに考察をしていきたい．

3　まとめ－逸脱状況への肯定性の獲得度合いの違いについて考察－

a　私とスーパーノアの場合

私のバンド「スーパーノア」は2005年に行われたボロフェスタにおいて「共催バンド」としてピックアップされた．ボロフェスタの本格的な準備が始まるのはイベント当日から1週間前程度ではあるが主催の数組は半年ほどの期間をかけて幾度かの会議を重ねる．その中で各々に役割が当てられていくことになるが，スーパーノアの場合はいくつかの広告をとるための営業にコミュニティの先輩へ付いていくなどがあった．これらの過程を通してコミュニティの中でのバンドの地位や責任といったものを獲得していったのである．さらに主催スタッフとしてだけでなく，出演者としても初日のトップバッターとしての出演を果たした．ボロフェスタには西部講堂（1ststage）と講堂前広場の野外ステージが大小（順に2ndstage，3rdstage）2つ，合わせて3つのステージが設置されており，私たちが

出演したのは2ndstageであった．1,000人を越す観衆の前で演奏することはバンドにとってギャランティを抜いて考えても大きなメリットがあり,これら一連の過程の中で私たちはコミュニティ寄りの思考や反応の定義を獲得していくことになったのである．2006年のボロフェスタにはメンバーのケガなどの事情により出演出来なかったものの，スタッフとして参加している．

b　キキカイカイノルールとS君の場合

キキカイカイノルールというバンドはN君のあまがっぱと同時期に他大学のサークル内から活動を始めた若手バンドである．ギターボーカル，ベースコーラス，ドラムコーラスの3人で構成され，その中でギターボーカルを担当するリーダーのS君はこれまでに挙げた若手バンドの中で最もコミュニティの中心にいる人物である．彼のバンドはスーパーノアと同じ2005年のボロフェスタから主催バンドとしてピックアップされている．出演者としても2005年に3rdstage，2006年には初日のトップバッターとして2ndstageに出演を果たしている．そしてスーパーノアの面々と同様に彼と彼のバンドのメンバーもまたコミュニティ寄りの反応の定義を獲得しており，3人のメンバーは――私よりひとつ年上が2人，同い年が1人――卒業後フリーターとなってバンドを続けている．いわばスーパーノアにとってライバルといって良い関係にある彼らの進路選択は，私たちの進路選択にも大いに影響を与えている．

c　N君の場合

次に，前述したN君がどのようにこのイベントに関わりコミュニティとの関係を持ったかについて考えたい．N君もまたこのイベントにはスタッフとして参加していたが，主催バンドへのピックアップはなされていない．出演者としては2005年に3rdstageへの出演を果たしてはいるが，正式にメディアなどで発表される出演者リストやタイムテーブルに記載されない，良く言えばシークレット扱いの隠し玉として，悪く言えば祭りの賑やかしとしての出演であった．若手のアマチュアバンドにとってこのイベントに出演するメリットはメディアへ名前が露出するという部分が大きい．固定の客（いわゆるファンと言って差し支えないだろう）を獲得することは若手アマチュアバンドにとっての一番の命題であり，その観点から行けば出演自体が大きなメリットではあるものの，メディアに名前が露出しないのであればその利益は半減といったところである．さて上記のようにスーパーノアやS君とは若干異なる関わり方をしているN君が就職をしてバンドを続けるという反応を選択したことは，このイベントがコミュニティの関わりの度合いに対する指標となり，

ひいては進路選択への反応に大いに影響しているものだと確信する.

d　K君の場合

次にK君の場合を考えていこう．K君は私よりふたつ年下であり，同じ年齢のメンバー他3人と組んでいるバンド「カンセコ」7)というバンドに所属していた．K君のバンドもまた同コミュニティに所属しており，扱いとしては前述の若手アマチュア3バンドよりももう少し若手の注目株といったところである．さてK君とそのバンドのボロフェスタへの関わり方がどうであったかといえばまだ若手のそれであった．スタッフとして全メンバーがイベントに参加していたが，主催へのピックアップ，イベント自体への出演も2006年の時点では達成していない．勿論来年，再来年には達成される見込みが強いものだが，2年間スタッフとして関わってきたK君は2006年の11月いっぱいをもってカンセコを脱退してしまった．音楽性の違いなどからメンバーが脱退することはよくあることであるが，K君の場合は進路選択に関するものであった．「資格習得の勉強に集中したい」というのがその理由であり，このK君君の反応もまた指標を判断するにあたって大きな材料となる．

e　考察結果

aからdまでで述懐した4人について共通するのはまず，「スタッフとしてイベントに参加している」ということである．そしてさらに細分化して「イベントに出演している」，「主催バンドとしてピックアップされている」ということが挙げられる．3つのファクターがコミュニティへどれほど関わっているかの指標となるならば，「スタッフとしてイベントに参加している」（初期段階）＜「イベントに出演している」（第2段階）＜「主催バンドとしてピックアップされている」（第3段階），というように現すことができ，右への段階を踏んでいるほどにコミュニティへの関わりが強いと言える．K君の場合は初期段階までの関わりであったためその他コミュニティ外からの影響を受けやすく，バンド，ひいてはコミュニティから離れていくという反応ほ選択することが容易であったと考えられる．同じように考えていくと，第3段階へ到達しているS君や私を含むスーパーノアのメンバーは非常にコミュニティと深く関わっており離れることが容易ではない状況にある．第2段階であるN君の場合はコミュニティに対して離れることはないものの一定の距離を保つような反応を選択することになっていると言える．

第5章　結論

第4章での考察のように，今回の調査と研究を通して，コミュニティ成員が当該コミュ

ニティとの関わりの深さによってコミュニティ外社会への諸反応が変化していくことを確信するに至った．コミュニティへの関わりが深くなるにつれて，諸反応の定義はコミュニティ寄りのものなっていくわけである．暴力的に一言でまとめるならば「駄目人間といっぱい付き合っていたら駄目人間になっちゃいますよ」ということである．何か至極当然のことを言ってるだけのようになってしまったが，このことは誰に対しても同じことが言えるであろうという点を付け加えておく．私がコミュニティの中で見てきた人たちの中には，一般的に考えて優等生とみなされるであろう人物にもかかわらず，コミュニティへ深く関わっていき，やや逸脱的な行動をよしとする人間になっていった人たちが少なからず存在したのである．人は誰しも駄目人間になる素養と可能性を秘めているのである．しかしながら決して悲観的になる必要は無いと私は考える．やや逸脱的なコミュニティ（アウトローとまでは言わないが）においても，一般的な社会において求められるような諸態度（当たり前の話ではあるが，遅刻をしない，無断で予定をキャンセルしないなど）を持っていなければコミュニティ内で円滑に活動することは不可能である．また，これもよく聞かれる言葉であるが，「サラリーマンとしてやっていけないような人間がバンドで成功するはずがない」というものがある．アマチュア・インディーズバンドにおいては，自分たちという「商品」を売り，またその価値を高めるために，様々な営業努力や創意工夫が必要とされるのである．つまりバンドで大成するための努力は例え夢破れてコミュニティ外の社会へ放り出されたとしても，決して無駄にはならないものであると私は考える．ですから，「息子がバンドばっかりやってて働く気配もありゃしないわ」とお嘆きになっている世の奥様がたには「お宅の息子さんは決して根っからの駄目人間ではないですよ，人生は長いですから多少の回り道くらい見守ってあげましょうよ」と私は伝えたいのである．心から．

[注]

1) 諸々の事情を考慮し，仮名とさせていただいた．

2) 同じく京都で活動しているアマチュアバンド．こちらも諸々の事情を考慮し，仮名とさせていただいた

3) Public Address（公衆伝達）の略．音響設備の総称．あるいはそのオペレーター．

4) インディーズ契約とはいえ，プロのミュージシャンとして活動している彼らに関しては仮名を使うかどうかは非常に判断に迷ったが，今回の提出にあたっては仮名は使用しないことにした．また適宜再考していきたい．

5) プロアーティストでは無いとの判断から注 1)2)と同様に仮名とさせていただいた

6) flyer. ちらしの意. イベント情報などが詳細に記されている. 各種宣伝媒体の中でも極めてローコストであり, 経済的に派手な宣伝をうてないアマチュアバンドにとっては最もポピュラーな宣伝手段である.

7) 注 1)2)5)と同様に仮名とさせていただいた.

後記

今回卒業論文を製作するにあたって, 多大な協力と情報提供と研究対象へ参画するきっかけを与えてくれたスーパーノアのメンバーに心から感謝します. 実際の会話や名前をある程度載せることを伝えたにもかかわらず, 普段通りに私に接してくれたことに関しては大変ありがたかったです. そしてまた卒論指導をしていただいた立木教授, ＴＡ越智さんや高瀬君はじめ多大な迷惑をかけてしまった方々にも深く感謝します.

非常にイタラナイ論文になっていますが, もし万が一僕の社会学科以外の知り合いや関係者がこれを目にすることがあってもそこはそっとしておいてもらえると非常にありがたいです.

参考文献

Becker, Howard Saul, 1967, Outsiders : studies in the sociology of deviance.（＝1978, 村上直之訳『アウトサイダーズ：ラベリング理論とはなにか』新泉社.）

Whyte, William Foote,1943, Street corner society : the social structure of an Italian slum.（＝2000, 奥田道大, 有里典三訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣.）

宝月誠, 2004,『逸脱とコントロールの社会学――社会病理学を超えて』有斐閣.

1ページあたりの字数（40字×30行）

総ページ数　23ページ（本文）400字詰め原稿用紙69枚.